くのでした。いつ飢死にするかも知れない、こごえ死にするかも知れない、そんな不安が続く生活でした。父は炉のそばで、ようやく習いおぼえた網すきの手仕事に精を出しています。兄嫁は、毎日朝から晩まで藩の仕事場へ行って、はた織りの仕事をしていくらかの工賃をかせぐのでした。五郎は、秋に拾い集めた薪がもうなくなったので、雪の中を枯枝などをさがし歩きました。冬の用水は、近くに井戸もなく、二丁（百二十米）ほどはなれた田名部川から汲んでくるしかありません。

川面の氷に穴をあけて汲みあげ、手桶で運んでくるのですが、途中で凍ってしまってとかすのが大変でした。毎日の食事は、海草類を干して細かくくだいてつくった「押布」に、ひとにぎりほどの米を入れてたいたかゆだけでした。「押布」というのは、海草の根や葉をこまかくきざんだもので、この地方の人の凶作のときの食べ物です。